

弁慶像の展開 —御伽草子『弁慶物語』—

池田敬子

1

源義経という人気の高い歴史上の英雄は、「弁慶」という腹心の家来を伴った姿で我々に記憶されている。主君義経についての様々な逸話は弁慶の助力を得て完成される場合も多く、特に晩年の悲劇の主人公義経には、常に彼をかばい支える弁慶の姿を欠く事ができない。

このように密着した主従のありかたを作りあげたのは『義経記』の功績である。『義経記』は、義経の生涯のもっとも華やかな時代であった源平合戦の頃については『平家物語』諸本に譲る形でほとんど具体的叙述をせず、その前後の時代—少年時代と晩年—に焦点を絞って物語を構成する。というより『義経記』の方法は、義経についての様々な説話を集大成していくのだが、少年時代と晩年の説話を熱心に蒐集したということなのであろう。そのことは、それだけ多くの説話がすでに生まれていたことを示すのである。義経の晩年を支えた弁慶の描写があるためには、弁慶がいかにしてそれ程の家来になったかといういきさつについての説話も必要になってくるだろう。『義経記』には義経と弁慶の出会いを描く場面があり、さらにそれ以前、弁慶の出生と成長を描く部分もあって—それはほぼ巻三全体をしめる—、武蔵坊弁慶という人物に関する説話も『義経記』に取り込まれる前から、義経説話とともに成長を遂げていたことがわかるのである。

それはおそらく『平家物語』が成長していく時代と重なるのであろうが、『平家物語』には弁慶の影は薄い。義経についてもその晩年は簡略に済ませる『平家物語』であるから、弁慶にいたるまでは『平家物語』編集者の関心を大きくひくことはなかったのであろう。『義経記』の出現は、この意味でも必要であった。『義経記』は前述のように『平家物語』が描かなかった時期の義経を描き、弁慶を描いた。それがさらに次の興味を引き出すのである。『義経記』の成立はおおむね室町時代初期といえる頃と考えられる

が、おそらくそれより少し遅れて『義経記』が描かなかった時期の弁慶を描く作品が登場する。御伽草子（室町物語）『弁慶物語』である。

2

『弁慶物語』は、『義経記』巻三をふくらませたような作品である。とはいえ、登場する弁慶の人間像は少し異なるのだが、このことは後述するとして、まず『義経記』巻三の内容と簡単に比較しておく。『義経記』巻三は大きく三つの段落に分けることができる。

まず第一は弁慶の誕生と比叡山に登り悪行によって追い出されるまで、第二は書写山炎上と義経との出会い、第三は義経と弁慶を保護したかどで四条上人が捕らえられ義経が都を去るまで、である。

一方、『弁慶物語』は『義経記』の内容を含みつつ（ただし異同あり）、上述のそれぞれの段落の間に独自のかなり長い説話を加えて物語を構成する。特に第一と第二の段落の間に相当する部分には四つの説話を加えており、書写山へ行くまでの弁慶の愉快的悪戯を書き連ねている。第二と第三段落の間に相当する部分は『義経記』とは異なり、四条上人は登場せず、弁慶の比叡山での師匠が捕らえられその救出作戦となっており、晩年の義経主従のありかたを暗示するような義経と弁慶の青年時代の姿を描いて物語を締めくくるのである。

このように『弁慶物語』は、『義経記』が描き尽くしたともいえる晩年については一切カットし、青・少年時代の弁慶を『義経記』の叙述の隙間を縫うように描く作品、ということが出来る。このような物語は、『看聞日記』永享六年（1434）十一月六日条に、「内裏物語御用之間、史漢物語六卷武蔵坊弁慶物語二卷献之」という記録が見えるように、既に室町中期には作られていたものと考えることができ、『義経記』の出現に刺激されるように、弁慶の物語がまとめられていったと思われるのである。そして室町末期から江戸時代初期にかけて写本・絵巻物・奈良絵本が作られ、古活字本や製版本も江

江戸時代には刊行された。

ここで、現在知られている『弁慶物語』の諸本の主なものを紹介しておく。

①穂久通文庫蔵絵巻『武蔵房弁慶物語絵巻』

一 軸

室町中期以前成立、前述の『看聞日記』のいう「武蔵坊弁慶物語二巻」に近いものかとの説あり。現存する最も古いものだが冒頭と書写山と最後の部分を欠く

②東京大学国文学研究室蔵写本『弁慶物語』二巻（全三巻の下巻欠、上巻も末尾に欠あり）

室町末期写か。途中に「天正十一年」の年号を含む書き入れあり。

③チェスター・ビーティ図書館蔵絵巻『武蔵房弁慶絵縁起』三巻

室町末期写か。記事内容や巻分けに①②と共通部分あり。

④京都大学国語学国文学研究室蔵写本『弁慶物語』二巻 江戸初期書写か。

独自増補記事や巻分けに他諸本と異なる工夫あり。

⑤国会図書館蔵写本『辨慶物語』二巻

元和七年写の奥書あり。

⑥京都大学附属図書館蔵奈良絵本、下巻のみ一冊 本文は製本版に近い。

⑦古活字本

大東急記念文庫・竜門文庫などに蔵。慶長・元和・寛永ごろに刊行。

⑧製版本

慶安四年刊・貞享二年刊が知られている。

古活字本と製版本は一括する形で掲げたが、異同が多いのは①から⑤の写本群である。異同といっても大幅なものではなく、御伽草子の諸本にしばしば見られる新しく編集される際の編者による工夫または改変の類いであるのだが、これが御伽草子（室町物語）の制作や享受に関わった人々の関心や教養などの実に種々様々なものを我々に示してくれる非常に興味深いものである。

3

ただし、『弁慶物語』における弁慶の人間像はおおむね一致しており、その意味で弁慶像の推移は、『平家物語』の断片的叙述からはよくわからないいささか怪しげな義経家臣群の一人という段階から、『義経記』が作り上げた異常出生譚をもつ申し子、比叡山の悪僧から義経の腹心の家臣へ

の変貌という路線の延長線上にある。しかしやはり『弁慶物語』は弁慶を主人公にたてる物語である、いや「弁慶」に主要な関心を抱くところから作り上げられた物語である点で、『義経記』の叙述から読者が抱く弁慶像よりもはるかに愛すべき人物に展開しているといわねばならない。『義経記』と共通する比叡山での悪行や書写山炎上や義経との出会いの場面であっても、『義経記』より遙かに天衣無縫、一種喜劇的な描写がなされていて、残忍な悪行というイメージは薄らぎ子供の天真爛漫な悪戯という雰囲気漂っている。しかも平家に捕らえられた比叡山での師匠を救出するところには、しみじみとした師弟愛が描かれてもおり、『義経記』巻三では全くみられなかった新たな弁慶像が創出され、それが青年義経との友情に近いような人間関係を作り上げ二人で奥州へ向う結びにつながり、物語を超えて晩年の義経を支える弁慶へと結びついていく。『弁慶物語』は、『義経記』が作り出した弁慶像を、その叙述の隙間を縫うように新たな場面を付け加えつつ、物語が意図する弁慶像へと巧みに変貌・展開させていったことができよう。新たに物語を編集した成果は十分あがっているといわねばならない。

これら『弁慶物語』諸本のなかでも④京大国文研究室本の独自異文はなかなかおもしろい。編集ミスと思われる文意の通じないところもあったりするのだが、飲酒戒の条や書写山への道行文、あるいは屁理屈ともいえるような論理を弁慶に語らせて次々と事件の展開を招く手法など、他の写本類とは趣を異にする性格があり、京大本の編集者への興味も大いに喚起される。

『弁慶物語』は、新日本文学大系『室町物語集』に採録されたことで今後研究が活発になると予想されるが、現状ではまだ写本群の成立順序も明確になっているとはいえない。果たして①を物語の最も古いものといってよいのかどうか不審な点もあり、新たな五巻の絵巻が発見されたという話もある。今後、諸本の調査と本文の研究がより進めば、弁慶の人間像はさらに展開していくかもしれないし、江戸時代の浄瑠璃などの後代の弁慶像への道筋が一層はっきりと見えるようになるだろうと期待したい。

（いけだ けいこ：京都府立大学文学部教授）